

「現場にて」

「修羅場というものは、こういうものか」と背筋が寒くなった。新聞記者になってほぼ丸六年。名古屋空港で起こった中華航空機の墜落や、三年前の広島の橋げた落下、様々な殺人事件や火事、鉄道事故……。俺も、それなりに現場を踏んできたかなあ」というちつぽけな自負心は、瞬く間に吹っ飛んだ。

平成七年一月十七日早朝、神戸と淡路島を襲った阪神大震災。発生から二日後の一九日、取材のため、大阪・淀川河川敷の臨時ヘリポートから、先輩記者三人と一緒に神戸へ向かった。ヘリはいったん大阪湾に出ると、湾岸沿いを飛んだ。社会部阪神支局員として、昨年三月まで二年間を過ごした尼崎市や西宮市の上空に差しかかると、眼下には信じられないような光景が広がっていた。国道2号線沿い

の家はほとんどがつぶれ、ビルが倒れている。阪神高速神戸線が橋脚ごと横倒しになり、落下した乗用車やトラックが何台も見えた。その横を、消防車やパトカーの赤色灯が行き交う。道が倒壊家屋でふさがれているからだろう、何度も右左折を繰り返す緊急車両が、地上の凄絶さを物語っていた。

「こんなん、どっから取材したらええんや」。キャップ役のK記者のつぶやきが、機内会話用のヘッドホンから聞こえた。残るY、M両記者は、機の振動も構わずにメモをとっている。今までの経験は、全く通じない。「見えるもの、聞こえることに全神経を集中するしかないな」。そう自分に言い聞かせた時、ヘリは高度を下げ、岸壁の所々が崩れた神戸のメリケンパークに降りた。

中原 康弘

(一九八九年法学部卒・読売新聞大阪本社社会部)

「とりあえず、神戸総局へ行こう」。私たちはボストンバックを担ぎ、ひび割れだらけの道を歩いた。途中、元町の商店街や中華街のある南京街を通った。同志社での学生生活も終わりに近づき、気楽な毎日を送っていた七年前、神戸に住むゼミの友人に連れられ、何度も中華料理を食べに来た。街角に豚まんを蒸す白い湯気が立ち昇り、あちこちの店には行列が絶えなかった。「卒業しても、またこうやって中華食べに来ようや」「ええねえ」。売り手市場と言われながらも、それなりに苦労して就職戦線をかいくぐり、自分も含めて何とか満足のゆく結果がでた。「あとは、思いきり遊ばなあかん」。学生気分浸りに浸りきっていたあの頃が、ふと浮かんた。

しかし、それもつかの間。斜めになったシンボルの朱塗りの門や、砕け散った石像を目にした瞬間、甘い思い出はかき消された。先を急ぐ先輩らの背中が目に入り、「ここで暮らしていた人たちは、どれ程の思いでこの惨状を見たのだろう」と、ようやく記者らしい思考が戻ってきた。

神戸総局に入ると、編集局のある二階は異様なムードが漂っていた。普段は、雑然とした中にもそれなりに秩序がある新聞社の仕事場だが、この時は混乱に次ぐ混乱で手の付けようのない有り様だった。兵庫県庁や神戸市役所、県警本部内にくらした災害対策本部からひっきりなしに流れてくるファックス、出先の記者からかかる電話、となり声……

続々と到着する地方支局からの応援組が頻繁に出入りし、誰が誰やら全くわからない。手短かに挨拶をすませた私たちは、取材車に乗り込み、大火災が街を焼き尽くした長田区を目指した。渋滞の道路を西へ進むと、被害のひどさがよりはっきりとわかる。木造の家は大半が倒壊、四、五階建てのビルには亀裂が入り、一階部分が無くなっているものもあった。着のみのままの住人が、我が家だったか、れきの前で立ち尽くしている。街中にサイレンの音が響き、いつしかそれも気にならなくなった。

「おい、あれ」。K記者の言葉で視線を移すと、左手前方に焼け野原が広がっていた。長田区菅原通り。窓を開けると、すすとほこりの匂いがする。あちこちから、まだ細い煙がたなびいていた。「ここで降りよう」。私たちは焼け跡の街に散り、取材を開始した。「とにかく、話を聞かにゃ」。避難所になっている神戸市立御蔵小学校の体育館に行き、片っ端から被災者に話しかけた。「家が燃えてしまった」「まだ、隣の夫婦が埋まってるんや」「消防車が来ても、何もならなかった。わしらが『はよ消してくれ』とかみついたら、消防士が悔しそうに『水が出んのやつ』て叫んだ。それで、わしらもあきらめた」。悲しい話で、ノートのページがどんどん埋まる。場所を変え、移動しながら取材し続けているうちに、気付いたら六時間がたっていた。

その夜、兵庫県庁の記者室に集った私たちは、それぞれ

に聞いた話を持ち寄り、今後の方針を打ち合わせた。本社からは「日々の生ニュースは神戸総局の取材班にまかせ、もう少し大きな視点でこの震災を検証するように」との指示があった。既に、わずか半日余りの取材で様々な疑問が浮かび上がっていた。「なぜ消火、救出活動がスムーズにできなかったのか?」「自治体の初動体制はどうだったか」「二次被害の心配は?」「防災計画は実際に役立ったのだろうか」。検証すべきテーマが次々に決まり、ようやく何をしたらいいのかが見えだした。「明日から、記事に必要なデータや証言を集めよう」。その晩は、全員が記者会見場のリノリウム製の床に段ボールを敷き、毛布を重ねて眠った。不思議と、寒さは感じなかった。

翌朝、笹山市長ら神戸市幹部が地震の発生直後にどんな行動をとったのかを調べるため、神戸市役所を訪れた。地上三十階建て。職員が「外観も眺望も日本一美しい市役所」と胸を張る庁舎のロビーには、毛布にくるまった被災者があふれていた。自家発電で動いていたエレベーターで、八階へ。特別会議室をぶち抜いた「災害対策本部」は、消防、土木、住宅、民生など各部署の職員が机ごとに分かれて座り、連絡先などを書いた紙が壁じゅうに貼られていた。その横の報道フロアには、二百人近い新聞、テレビ、通信社の記者が走り回り、携帯電話や無線機での会話が渦巻いている。床には、臨時電話やワープロ、モニターテレビ用の

電源コードが縦横にはわされ、何人かが足を引っ掛けていた。

「応援、御苦労さん」と机から顔を上げた市役所キャップのF記者は、地震発生から一睡もしないまま三日目を迎えていた。無精ひげの目立つ顔に、目だけがギラギラしている。簡単に庁内の説明を受け、早速、災害対策を担当する総務局庶務課のI課長にアタックした。I課長は疲れをおして、自分は須磨区の自宅からマイカーとタクシーを乗り継いで午前七時前に役所に駆け付けたこと、その時、既に市長が防災服姿で周辺を視察していたことなど、当日の市幹部の動きを知る限り語ってくれた。「初動体制に問題はなかったのか?」と嫌な質問をぶつけると、「正直言って、神戸の災害対策は台風や水防ばかりに重点を置いていた。それにしても、関西でこんな大地震が起こるなんて……」。偽りのない、本音だった。

結局、私たちは、あちこちに亀裂が入ったラブホテルや記者クラブのソファで寝泊まりしながら、一週間かけて神戸の町を取材した。その間に集った数十人の被災者の証言やデータ、この目で見た光景などは、「阪神大震災 現場を探る」という連載の基礎となり、連日の紙面に反映された。それ以外にも、生のニュースとして活字になった話もある。神戸から大阪に戻った私は、一日だけ休みをもらい、今度は古巣の阪神支局の応援組に回されて、二月九日現在、西

宮市内を中心に取材を続けている。

震災から嵐のような三週間が過ぎた今、寸断されていた鉄道の開通区間は増え、電気や水道などのライフラインも徐々に復旧しつつある。震災報道のみだった紙面にも、一般のニュースが載り始め、東京はおろか、すぐ隣りの大阪市内でも「そろそろ被災地も落ち着いたやろ」という声が出るようになった。

しかし、現実はいまだに厳しい。この原稿を書いている今も、二十万人以上の人々が不便な避難所での生活を送りながら、わずかな希望を求めて苦闘している。亡くなった五千三百人近い犠牲者のドラマを含め、私たちが報道しなければならぬ事が、まだまだ無限にあるのだ。

かつて、広島支局勤務の経験があるデスクに、「君にとって『あの日』とは何の日や?」と問われたことがある。私が「昭和天皇が崩御した日ですかねえ」と曖昧に答えてお茶を濁すと、そのデスクは「俺は、この日本で『あの日』と言えば、原爆が落とされた日やと思う」と言い切った。

今、ようやく私の中にも『あの日』と呼べるものが形成されつつある。ただ、余りの多くの悲しみとの出会いだけが頭に残り、その重さを受け止め切れないでいるのも確かだ。

当分、取材は続くだろう。記者として、人間として、もう二度と巡り合うことのない『あの日』を自分の中で昇華

させられるまで、この現場から目をそむけることなく、事実を書き続けてゆきたい。

